

大学生の現実およびインターネット上の関係性における心理的居場所感が精神的健康に与える影響

小川直希

(広島国際大学心理科学研究科)

目的

大学生の現実の関係性（友人や家族など）における心理的な居場所（社会的居場所）と心理的 well-being との間に有意な正の相関があることから、現実の関係性における心理的な居場所が精神的健康を向上させる可能性が示唆されている（石本, 2010）。

また、近年では CMC（Computer Mediated Communication）を通してコミュニケーションするネット上の他者が「新たな」関係性として想定されている（長谷川, 2007）。このような CMC が well-being に対して肯定的な影響を与え、抑うつを軽減することが示唆されている（Krunt et al., 2002）。このことから、CMC の発展に伴いネット上の他者に対しても心理的な居場所を感じており、そのことが精神的健康を向上させるのではないかと考えられる。

以上のことから、本研究では現実およびインターネット上の関係性に対する心理的居場所感が、それぞれ精神的健康（主観的幸福感と抑うつ）に影響を与えるというモデルを考え、そのモデルの妥当性を検討した。

方法

2016 年 10 月下旬から 11 月上旬にかけて、H 大学の心理科学部の学生 200 名に対して、質問紙調査を行った。そのうち有効回答者は 185 名（男性 90 名、女性 95 名、平均年齢 19.99 歳）だった。

現実およびインターネット上の関係性に対する心理的居場所感を測定するための尺度として石本（2006）が作成した居場所感尺度を用いた。

また、精神的健康を測定するための尺度として、心理的 well-being の考え方も踏襲して作成された主観的幸福感尺度（伊藤ら, 2003）と抑うつ度を測定するための BDI（Beck et al., 1961）を用いた。

結果

現実およびインターネット上の関係性に対する居場所感が主観的幸福感、抑うつ度に影響を与えるというモデルを考え、構造方程式モデリングによるパス解析を行った。有意でないパスを取り除く等の、修正をしたものを図 1 に示す。

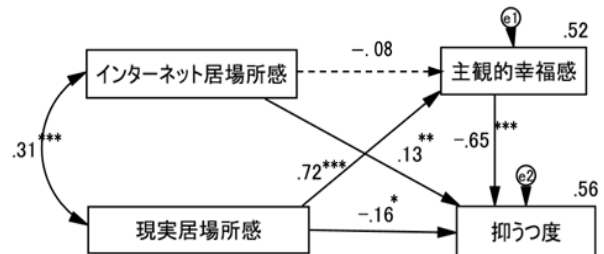


図 1 現実およびインターネット上の関係性に対する居場所感と主観的幸福感、抑うつ度との関連

$\chi^2(1)=2.07, n.s., GFI=.99, AGFI=.94, CFI=.99, RMSEA=.08, AIC=20.07$
 $***p<.001, **p<.01, *p<.05$

図 1 より、インターネット居場所感と主観的幸福感と有意な関連を示さず、抑うつ度と正の関連を示した。現実居場所感と主観的幸福感と有意な正の関連を、抑うつ度と有意な負の関連を示した。また、現実居場所感とインターネット居場所感と有意な正の相関を示し、主観的幸福感と抑うつ度は有意な負の関連を示した。また、現実居場所感から、主観的幸福感を介した抑うつ度への間接効果について、Sobel 検定を行った。現実居場所感から抑うつ度への間接効果 ($\gamma=-.47, p<.001$) は有意であった。

考察

結果より、インターネット上の関係性に対する心理的居場所感、主観的幸福感と関連がなく、抑うつ度を高めてしまう可能性があることが示唆された。インターネット依存傾向の強い群では、抑うつなどメンタルヘルス上の問題が多く認められたと報告されており（岡本ら, 2014）、インターネット居場所感とインターネット依存と何らかの関連があった可能性が考えられる。現実の関係性に対する心理的居場所感、先行研究と同様に精神的健康を高めることが示された。これにより、現実の関係性に居場所づくりをしていくことの有用性がより高まったと言える。また、今回の結果を踏まえ、インターネット居場所感と現実居場所感、インターネット依存等との関連を精緻化し、さらなるモデルの検討をしていく必要がある。

引用文献

石本雄真(2010). カウンセリング研究, 43, 72-78.
 Krunt et al.(2002). Journal of Social Issues, 58, 49-74. 他